



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	誕生から30年を経たエコツーリズムの可能性（特集 環境と観光で実現する インバウンド・ジャパン）
Author(s)	敷田, 麻実
Citation	環境会議, (46), 44-49
Issue Date	2016-09-05
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/63725
Type	article
File Information	2016-9_kankyokaigi-text.pdf



誕生から30年を経た エコツーリズムの可能性

敷田 麻実

北陸先端科学技術大学院大学 教授

エコツーリズムによる 地域経営の可能性

四季の花々や景勝地訪問など、自然観賞を楽しむことは、ごくありふれた観光だ。しかし、そこに高い付加価値を付けるために、約30年前に「再構築」されて誕生したのが「エコツーリズム」である。ガラパゴス島などの特別な意味を持つ生態系や、

原生自然の熱帯林など、人が立ち入ったことが少ない生態系を対象とした「エコツアー」は、たちまち新しい体験を求める観光客の人気を得た。この傾向が一般の旅行商品、観光サービスとして普及し、多くの観光地で多様なエコツアーが体験できるようにになった(写真)。

もともとエコツーリズムでは、豊かな自然資源に恵まれた地域が、地

域外資本によるリゾート開発を脱し、自らが主導して利益を確保できると考えられていた。世界的に普及したマスツーリズムは、先進国や都市側の観光客や業者がメリットを得られる反面、観光地の住民や地域関係者は、資源を提供させられるだけのことが多かった。そのためエコツーリズムでは、観光客が自然を楽しむ(鑑賞する)だけではなく、環



身近になったエコツアー(北海道・知床国立公園)

境保全とともに、途上国や地域側が、観光を通して自らの利益確保を目指すとした。国際エコツーリズム協会(The International Ecotourism Society)も、エコツアーを「自然環境を保全し、地元住民の福利の向上と教育や解説につながる、自然地域での責任ある旅行」と説明している。しかし、当初の期待に反して、普及したエコツーリズムには課題も多い。最大の課題は、地域側が今まで効果的に使えなかった自然資源に付加価値を付けることの難しさである。地域の自然をかたくなに守る「保護」であれば、まったく利用させないという選択ができるが、エコツアーで地域の自然環境を使わせて価値を生み出しつつ、その価値を保全する、つまり「ブランディング」するのは簡単ではない。また、観光客は

地域外にいる消費者である。彼らのニーズに応じて、旅行商品であるエコツアーを提供するには「マーケティング」を行う必要がある。

また自然資源は、地域の共有物でもある。それを巧みに使って価値を生み、利益を得ていくことは、当然ながら将来世代にも責任が発生する。手元の自然資源をある意味で「売り物」にするには「戦略」が必要だ。消費者の気ままなリクエストに応えているだけでは、地域の資産を失う選択となりかねない。

しかし、こうした課題がありながらも、地域でエコツーリズムを推進するのは、やはり従来の選択肢とは異なるからだ。自然環境保全や地域社会の再生、経済の活性化など、地域の持つ課題を連携させて解決できる可能性がエコツーリズムにはあ

る。それは従来、個別に解説していた課題を、多様な主体が関わり、さらに価値や利益も生む観光という手段の魅力である。その点では複合した問題のマネジメントによる問題解決、つまり「地域経営」のすぐれた手段と考えることができる。

具体的には、エコツアーのためのガイドの育成や雇用で、自らの地域や環境保全の取り組みについて語る地域人材を育成できる。そして資源を効果的に使うブランディングのための地域資源調査では、地域にある資源の素晴らしさに気がつくことができる。これは地域住民による誇りの回復である。また地域が持つ有限な資源を効果的に活用するために、地域外のニーズを把握しながら、自らの地域の特徴を説明するマーケティングや付加価値向上策に取り組

むことになるだろう。このようにエコツーリズムは、地域の資源を効果的に活用する「地域資源戦略」である。エコツアーの実施を通してこのことに気づくことが、エコツーリズムの最大のメリットであろう。

責任ある「ためらい」が 保全と利用を両立させる

エコツアーを実施することは、自然環境を意図的に利用することである。しかし、生態系を環境収容力以上に利用すれば、たちまち疲弊する。観光は「自然を見るだけだから」と、影響が過小評価されることが多いが、エコツーリズムが持つ「自然に優しい観光」というイメージが「免罪符」となり、人の介入があまりない生態系や貴重な動植物へのアクセスを増加させることにもなってい



知床五湖地区の利用前のレクチャー
(北海道・知床国立公園)

る。

世界自然遺産である北海道の知床半島では、住民の日常生活ではほとんど接触がなかったヒグマが観光資源化されている。そのためヒグマの行動の変化や、人慣れの問題が発生している。このような、エコツアーによる生態系へのアクセスには、自然環境への科学的理解が必要だが、それ以上に、本来は接触できない自然を体験しているという観光客の「ためらい」や、それを見ているのだから節度が重要だという、地域関係者の「責任ある態度」が求められて然るべきだ。

知床国立公園で原生自然に立ち入る際には、ヒグマとのつき合い方を解説したビデオを観光客に見せ、自然科学的な解説とともに知床の自然への畏れを伝えている。エコツーリ

ズムの推進では、ガイドブックやパンフレットでの理解に頼るだけではなく、地域側関係者による観光客へのこうした働きかけ、語りかけが重要である。神社などの荘厳な空間に入る際に、手を清め、気持ちを改めると同様、すぐれた自然環境に立ち入る際には、入口でのイニシエーションが重要である(写真)。

しかし、こうしたソフト面だけではなく、エコツアーで保全と利用のバランスをとる方法は具体的に用意されている。観光による「利用圧」を巧みに避ける木道設置などのサイトマネジメント、自然資源状態の調査による的確な情報提供、ガイドによる誘導など、エコツアーを実施する際に採用できる手段は数多い(敷田ほか、2011)。

こうした保全のための手段を採



自然を解説するエコツアーガイド
(北海道津別町)

用しない「むき出しの自然利用」は、少人数であれば回復可能な範囲と済ますこともできるが、経営的にも成り立つ、頻度が高いエコツアーによる利用では慎むべきである。以前の自然が豊かだった時代を経験した人の中には、ガイドに案内されたり、いろいろな利用上のルールに従ったりすることを嫌う、ゴーイングマイウェイ型の利用が目立つが、どんなに信心深く、参拝の経験が豊富でも、神社の宮司を無視した振る舞いをする参拝客はいない。

生物も文化もという

「生物文化多様性」の視点

エコツーリズムの創始では、ガラパゴス島などの特別な生態系や、大陸の国立公園などの原生自然を対象としたエコツアーが多かったため

に、エコツアーにすぐれた自然体験だと考えられることが多い。しかし、こうしたエコツアーに人気がある理由は、自然の規模が大きいこと、つまり「大自然」を見ることへの興味である。米国のグランドキャニオンやヨセミテ国立公園の魅力は、まさに、そこにある。

しかし日本のように、人が関わってきた生態系では、規模の魅力ではなく、その関わり自体が魅力である。石川県の白山国立公園は、古くから僧の修練の場であった。白山では厳しい自然の中で修行を積むための営みが行われてきた。また、採集や狩猟などで自然資源をうまく利用して人が生き残っていく、すぐれた生活の営みが地元集落にあった。こうした人と自然の関わり、つまり「文化」がエコツアーで紹介できれば、自然

科学的なデータに基づく生態系や生物の解説に加えた魅力が生み出せる(写真)。

このようにエコツーリズムの推進では、自然の魅力だけに頼るのではなく、地域が維持してきた文化を提供することも重要である。人と自然の関わりの中で、人が自然に影響を与え、また、与えた影響によって人の営みに変化する「人と自然の相互作用」の中で文化は形成されてきた。生物も文化もという視点は重要である。

こうした生物と文化の相互作用は、近年「生物文化多様性」として1990年代から研究者も注目し始めている(Maffi, 2007)。生物多様性だけではなく、文化多様性も重要であり、その相互作用に意味があるという考え方である(敷田、

2014)。エコツアーの魅力を生物多様性だけに限るのではなく、この概念を基本としたい。

しかし、だからといって「日本の事情」をことさら強調したいのではない。自然とのつき合いには優劣はない。それぞれの民族が歴史的に培ってきたつき合いの歴史が、生物文化多様性として豊かに維持されていればよいのだ。また、生物文化多様性は過去の人類史の問題ではなく、これからも生み出されていくはずである。エコツアーの自然体験の中で、新たな自然とのつき合い方、つまり「文化」が創出されれば、それは生物文化多様性の豊かさにつながる。このようにエコツーリズムの推進は、私たちの自然とのつき合い方を問い直すことにもなる、きわめて重要な地域政策である。



しきだ・あさみ

石川県庁に15年間勤務後、金沢工業大学教授、北海道大学観光学高等研究センター教授を経て、2016年から北陸先端科学技術大学院大学教授。知床世界自然遺産地域科学委員会委員。専門は、地域経営における地域資源戦略(エコツーリズム)。編著書に『地域資源を守っていかすエコツーリズム』ほか。

参考文献

Maffi, L. (2007) 'Biocultural Diversity and Sustainability', 『The SAGE Handbook of Environment and Society』, J. Pretty et al. eds., Sage Publications, pp.267-279.

敷田麻実(2014年)「自然共生社会の実現に向けた生物文化多様性の議論『環境経済政策研究』7(1), pp.73-76.

敷田麻実ほか(2011年)『地域資源を守っていかすエコツーリズム——人と自然の共生システム』(講談社) 敷田麻実・森重昌之編 224p.